琉球大学学術リポジトリ

古代日本語のすがた動詞のス形、シヌ形、シツ形 -『にっぽんご 8』第7章の解説-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学人文社会学部琉球アジア文化学科 公開日: 2025-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 狩俣, 繁久, 大胡, 太郎, 當山, 奈那 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002021221

古代日本語のすがた動詞のス形、シヌ形、シツ形
―『にっぽんご　８ 』第７章の解説―

狩俣繁久、大胡太郎、當山奈那

1. はじめに

（1）教育科学研究会･国語部会は、日本語のかなもじ、文法、発音とローマ字、語彙、漢字についてとりたてて行う言語指導のためのテキスト『にっぽんご』シリーズを１から７まで刊行している。そのシリーズの一つとして中学生以上の生徒のための古典文法についてのテキスト『にっぽんご８　古代日本語の文法（試案)』がある[1]。

高瀬匡雄（2014）によれば、『にっぽんご 8　古代日本語の文法（試案）』には 32 頁の 1973 年版と 63 頁の 1974 年版がある。筆者らの手元にあるのは、奥付や発行年や著者名の無い 58 頁のタイプ印刷版である。目次も 1973 年版と 1974 年版と同じである[2]。1973 年版と 1974 年版の間のものではないかと考える。筆者らの手元にあるものを 1974 年版 ver2 とする。

著者らは 1974 年版 ver2 をテキストに使用した「古典日本語概説」を 1993 年から開講している。受講生の中から古代日本語文法を卒業論文、修士論文のテーマにする学生がでてきた（末尾の卒業論文、修士論文の一覧を参照)。

筆者らは、1974 年版 ver2 に講義内での検討、および、卒業論文、修士論文の成果を反映させ、『にっぽんご８　古代日本語の文法（改訂版)』(以下、『改訂版』)を作成中である。本稿は、その「7 章すがた動詞」の解説である。【テキスト】とした教科書体の部分は、『改訂版』の本文である。

『改訂版』の目次を以下に掲げる。左側が『改訂版』で、右側が 1974 年版 ver2 の目次である。

---

[1] 連語論のテキスト『にっぽんご　３の下』と構文論のテキスト『にっぽんご４の下』も未公刊である。

[2] 詳細は高瀬匡雄（2014.174-178）を参照。

0.　まえがき	まえがき
1. 動詞の終止形と連用形	1. 動詞の終止形と連用形
2. 動詞の活用(1) 終止形	2. 動詞(1) 終止形の活用
3. 動詞の活用(2) うちけしの形	3. 動詞(2)　終止形の活用(うちけし動詞)
4. 名詞の格	4. 名詞の格
5. 格のとりたて	5. 格のとりたて
6. 叙述文と質問文	6. 動詞(3) すがた動詞
7. すがた動詞	7. 動詞(4)　連体形
8. 動詞の活用(3)　連体形	8.　形容詞
9. 形容詞	9.　動詞(5)　条件形と仮定形
10. 動詞の活用(4)　条件形と仮定形	10. 動詞(6)　自動詞と他動詞、たちばの動詞
11. 受動文と使役文	11. むすび
12. むすび	12. 法の助動詞
13. 法の助動詞	

『改訂版』では「7 章 すがた動詞」に以下の変更を加えた。

1974 年版 ver2 ではシヌとシツとシタリの三つの形式を取り上げているが、『改訂版』では次節以下で述べるようにスもすがた動詞と認めて加えた。また、1974 年版 ver2 ではシツとシヌを終結相とし、シタリを持続相としているが、『改訂版』ではスを実現動詞、シヌとシツを達成動詞、シタリを結果動詞とした。

ス、シヌ、シツ、シタリの表す文法的な意味は、現代日本語に一対一に訳できる形式がなく、理解しづらいところがある。そこで、古代日本語のすがた動詞の理解を助けるために、規定１に図を三つ入れ、規定２の例文に現代日本語訳を加えた。この変更は、現代日本語の文法についての体系的な指導を受けていない生徒の理解を助けるものでもある。

なお、今後、『改訂版』には「叙述文と質問文」を６章として加え、叙述文に焦点助詞「ぞ、なむ、こそ」が現れ、質問文に「や、か」が現れる内容にする。10 章「自動詞と他動詞とたちばの動詞」を 11 章「受動文と使役文」に変更する予定である。「自動詞と他動詞」は 11 章の一部として取り上げる。

2. 分析の対象

（2）古代日本語の動詞の終止形は、テンスとムードにしたがって活用する。スの活用形の体系は表１のようにまとめることができる。シヌもシツもシタリもテンスとムードにしたがって表１と同じ活用表にまとめることができる。

表１　スの終止形の活用表

			時　制		
			非過去	過去	
				第一過去	第二過去
法	叙述法	第一終止形	よむ。	よみき。	よみけり。
		第二終止形	よむ。	よみし。	よみける。
		第三終止形	よめ。	よみしか。	よみけれ。
	推量法	第一終止形	よまむ。	よみけむ。	
		第二終止形	よまむ。	よみけむ。	
		第三終止形	よまめ。	よみけめ。	
	命令法		よめ。		
	意志勧誘法		よまむ。		

叙述法と推量法の第二終止形は、焦点助詞「ぞ」「なむ」を含む強調文の述語に現れる活用形である[3]。第三終止形は、焦点助詞「こそ」を含む強調文の述語に現

[3] 検定教科書の文法論では焦点助詞を「係助詞」と呼び、その係助詞が文末の述語の形式を支配する「係り結びの法則」が古代日本語にあるとする。しかし、係助詞は文中の特定の部分をとりたてる特立の機能しか持っていない。したがって、係助詞＝焦点助詞が文の最も重要なモダリティーの形式を支配する能力を持っていないことは明らかである。山田健三（2004:15）は、「係り助詞（I・II）は，述部の諸活用形に選択されて出現し，原則としてそこに義務的な関係はない」と

れる活用形である。第一終止形は焦点助詞を含まない非強調文の述語に現れる活用形である。

第二終止形は連体修飾的な従属文の述語になる連体形と同音であり、第三終止形は条件的な従属文の述語になる已然形条件形と同音である。文末に現れる終止形（第二終止形と第三終止形）は、従属文の述語になる連体形および已然形条件形とは構文＝機能的な意味が異なる。第二終止形と第三終止形は、第一終止形とともにテンスとムードで作る活用体系のなかで固有の文法的な意味を表す。本稿では第二終止形、第三終止形と連体形、已然形条件形を同音形式と考える[4]。

本稿では叙述文の文末に現れる第一終止形と第二終止形の非過去形を主な分析の対象にする。推量法と命令法と意志勧誘法の活用形を対象に含めない。また、第三終止形を述語に持つ文のモダリティに不明なところがあること、第二過去を述語に持つ文にムード的な意味に不明なところがあることから、本稿では会話文の叙述文に現れる第一終止形と第二終止形の非過去と第一過去の活用形に絞って用例を検討した。

3. すがた動詞

（3）現代日本語の文末に現れるスル、シタ、シテイル、シテイタの四つの文法的な形は、アスペクトによって完成相スル・シタと継続相シテイル・シテイタとが対立し、テンスによって非過去スル・シテイルと過去シタ・シテイタとが対立し、アスペクト・テンス体系を形づくっている（表２）。

スルが完成相非過去で、シテイルが継続相非過去である、のようにアスペクト

述べ、係助詞＝焦点助詞と文末の述語との間に「義務的な関係がない」（＝支配していない）と論じている。山田（2004）は焦点助詞が文末の活用形を支配していないと考える本稿と同意見である。焦点助詞が「文末の諸活用形に選択されて出現」するのは、叙述文に「ぞ、なむ」が現れ、質問文に「や、か」が現れると考える本稿と同意見である。

[4] 推量法非過去の第一終止形と第二終止形「よまむ」と意志勧誘法の「よまむ」を同音形式と考える。

とテンスの二つの形態論的カテゴリーは一つの文法的な形の中で実現している。

表２

		アスペクト	
		完成相	継続相
テンス	非過去	スル	シテイル
	過去	シタ	シテイタ

古代日本語の文末に現れる動詞には、ス、シキ、シケリ、シヌ、シニキ、シニケリ、シツ、シテキ、シテケリ、シタリ、シタリキ、シタリケリがある。これらの形は、テンスによってス、シヌ、シツ、シタリの非過去形とシキ、シニキ、シテキ、シタリキ、および、シケリ、シニケリ、シテケリ、シタリケリの２系列の過去形が対立する（表３）。

表３

テンス	非過去	ス	シヌ	シツ	シタリ
	過去	シキ	シニキ	シテキ	シタリキ
		シケリ	シニケリ	シテケリ	シタリケリ

（４）1974 年版 ver2 の７章のタイトルは「すがた動詞」となっている。いっぽう、シヌとシツを終結相とし、シタリを持続相としていて、現代日本語の完成相、継続相と同じく「相」としている。「すがた動詞」を現代日本語のシハジメル、シツヅケル、シオワルのような動作や変化のすがたを表す局面動詞と理解したらよいのか、古代日本語のス、シヌ、シツ、シタリが現代日本語の完成相（スル･シタ）、継続相（シテイル・シテイタ）と同じく形態論的なカテゴリーとしてのアスペクトに関わる形式なのか確定できていない。パーフェクトを表すシタリを除くス、シヌ、シツはうごき[5]（動作、変化）の時間的な展開の捉え方が異なるアスペクトに関わる形式で

[5] 本稿では「運動」を 1974 年版 ver2 の「うごき」を踏襲して使用する。

あると考える。スを実現動詞、シヌとシツを達成動詞、シタリを結果動詞と暫定的に呼ぶ。工藤（2014.643）のアスペクトの定義「時間的展開性ある（終了あるいは開始の時間的限がある）動的事象を表す運動動詞述語に成立する形態論的カテゴリー」に従う。

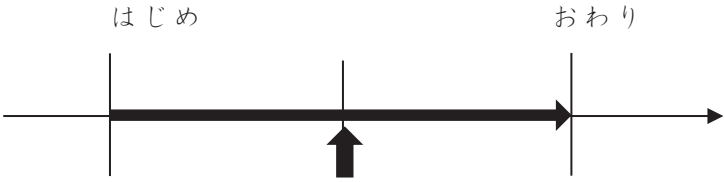
表４

		すがた動詞			
		実現動詞	達成動詞		結果動詞
テンス	非過去	ス	シヌ	シツ	シタリ
	過去	シキ	シニキ	シテキ	シタリキ
		シケリ	シニケリ	シテケリ	シタリケリ

【テキスト】規定１

うごきには　はじめと　おわりが　あります。　その　あいだに　つづいて　いる　部分が　あります。　また、おわった　あとに　結果が　のこります。　このような　うごきの　すがたを　あらわす　ために　すがた動詞を　つかいます。

図１．つづいているうごき



食ふ（食べている）

図２．うごきのはじめとおわり

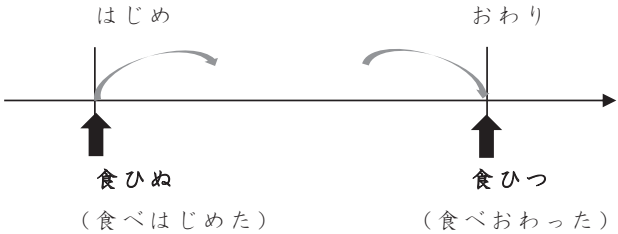
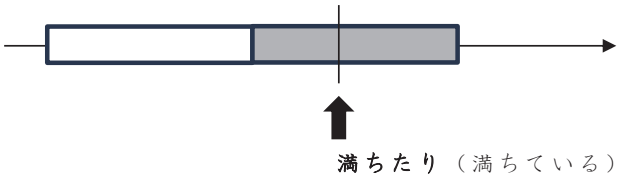


図３．おわったあとの結果



（5）規定１は、四つのすがた動詞がどんなものであるかを理解させるための導入である。「つづいているうごき」、「はじめのうごき」、「おわりのうごき」、「おわったあとの結果」の四つの局面があること、そのようなうごき（動作や変化）の局面を表すのがすがた動詞であることを説明している。

規定１で示した四つの局面が具体的にイメージできるよう三つの図を挙げた。図１には実現動詞ス「食ふ（食べている）」を、図２には達成動詞シヌ「食ひぬ（食べはじめた）」とシツ「食ひつ（食べおわった）」を、図３には結果動詞シタリ「満ちたり（満ちている）」の、それぞれの語形と現代日本語訳を入れた。

図１と図２では主体動作客体変化動詞「食ふ」を使って「つづいているうごき」と「うごきのはじめとおわり」を表している。図３では主体変化動詞「満つ」を使って「おわったあとの結果」を示している。図３の動詞を図１、図２と同じ動詞（食ふ）にしなかったのは、主体変化動詞「満つ」「落つ」の現代日本語の継続相「満ちている」「落ちている」が「おわったあとの結果」、すなわち結果的な状態を分かりやすく説明できるからである。うごきの４つの局面を三つの図で示したのは、実現動詞、達

成動詞、結果動詞に対応させているためであり、規定２への導入でもある。

【テキスト】規定２

すがた動詞には、 実現動詞、 達成動詞、 結果動詞の　三つがあります。

実現動詞

ス（つづいているうごき）

　めし　食ふ。（ご飯を　食べている。）

　雨　降る。（雨が　降っている。）

達成動詞

　シヌ（うごきのはじめ）

　めし　食ひぬ。（ご飯を　食べはじめた。）

　雨　降りぬ。（雨が　降りはじめた。）

　シツ（うごきのおわり）

　めし　食ひつ。（ご飯を　食べおわった。）

結果動詞

シタリ（おわったあとの結果）

　光　満ちたり。（光が　満ちている。）

　めし　食ひたり。（ご飯を　食べおわっている。）

　雨　降りたり（雨が　降りおわっている）

（６）規定２は、三つのすがた動詞の四つの語形とその例文を挙げて、すがた動詞に実現動詞、達成動詞、結果動詞の三つがあること、実現動詞がスであること、達成動詞がシヌとシツであること、結果動詞がシタリであることを示している。なお、ス、シヌ、シツ、シタリの四つのすがた動詞は多義的なのだが、ここではそれぞれの代表的な意味を示した。

実現動詞スは、発話時に続いているうごき（動作と変化）を表す。主体動作客体変化動詞「食ふ」と主体動作動詞「降る」を用例に使い、現代日本語の継続相「シテイル」で訳して、うごきが続いていることを示した。

達成動詞シヌは、うごき（動作や変化）が発話時に開始したこと、すなわち開始限界を越えたことを表す。達成動詞シツはうごき（動作や変化）が発話時に終了したこと、すなわち終了限界を越えたことを表す。

達成動詞のシヌとシツは、現代日本語の過去形「シタ」で訳されることが多い。しかし、シニキ、シテキの第一過去形とシニケリ、シテケリの第二過去形があることからも分かるように、達成動詞のシヌとシツは非過去形である[6]。しかし、開始限界を表す「しはじめている」、終了限界を表す「しおわっている」に現代日本語訳すると、前者は開始限界達成後に動作が継続していることを、後者は終了限界後に結果が継続していることを表す。完成相非過去形に訳すと未来の出来事を表す。いずれも不都合である。完成相過去形に訳すと第一過去形、第二過去形の現代語訳と競合する。そこで、発話時に限界に越えたことを表すことを示すために規定１でも規定２でもシヌを「食べはじめた」、「降りはじめた」、シツを「食べおわった」と現代日本語訳している。

結果動詞シタリは、発話時にうごき（動作や変化）が終わった後の結果的な状態があること、すなわち、パーフェクトを表す形である。主体変化動詞「満ちたり」は変化結果の継続を表す現代日本語の「満ちている」で訳してシタリ形の結果動

---

[6] 藤井貞和 2024.122 は、シヌ、シツについて次のように述べている。

「な・む」は未来完了。「に・き」は過去完了をあらわす、と機能を名づける。「つ」は「て・む」が未来完了、「て・き」が過去完了、と整然としている。これを要するに、「ぬ、つ」は完了であり、「む」や「き」と併用される以上、これら「つ、ぬ」じたい、時制ではありえない

シヌ、シツについて詳しい言及はないが、ナム、テムが未来完了、シニキ、シテキが過去完了を表しているのに対して、シヌ、シツが現在完了を表していて、テンスを表す形式ではないことを述べているものと解する。これは本稿の考え方に近いものである。

詞が状態パーフェクトを表していることを示した。

主体動作客体変化動詞「食ひたり」と主体動作動詞「降りたり」を「食っている」「降っている」と継続相非過去形に現代日本語訳すると一義的には動作の継続を表すことになって不都合なので、「食いおわっている」「降りおわっている」で訳している。結果動詞シタリは西日本方言の「満ちとる」「食っとる」「降っとる」にほぼ相当する、パーフェクトを表すと考える[7]。

4. 実現動詞

（7）実現動詞スは、次の五つの意味を取り出した。

（1）発話時をまたいで続いている動作や変化（シテイル）
（3）多回的な動作（シテイル）
（4）反復的なできごと（シテイル）
（2）発話時に実現する動作や変化（スル）
（5）未来のできごと（スル）

（1）は一回的な運動を表し、（2）は多回的なうごきをあらわすが、（1）も（2）も同じ時間と場所で発生するレアルなうごきを捉えたものである。（3）はうごきの複数性の点で（2）に似るが、時間と空間が同じでなくてよくポテンシャルなうごきである。（1）（2）（3）は現代日本語のシテイルに訳できる。（4）は特定の時間に紐づけされたアクチュアルな一時的うごきを捉えたもので、（5）は非レアルなうごきを捉えたものである。（4）（5）は現代日本語のスルに訳できる。

実現動詞スは、形式的には現代日本語の完成相非過去スルに対応する。しかし、現代日本語のスルには、「（1）発話時をまたいで続いている動作や変化」、「（2）多回的な動作」、「（3）反復的なできごと」の意味はない。これらは現代日本語ではシテイルが表す。「（4）発話時に実現する動作や変化」は一部の遂行動詞に見

[7] 狩俣繁久・島袋幸子（2024）が論じている沖縄語のシテアル形も古代日本語のシタリ形と同じだと考える。

られるが、古代日本語のばあい、使用される動詞の範囲の広いことが現代日本語と異なる。「（5）未来の出来事」は古代日本語のス形が現代日本語のスルに通ずるものである。現代日本語のスルに対応する実現動詞スは、（1）（2）（3）の意味を表す点が現代日本語と異なる。

【テキスト】規定３

１　実現動詞

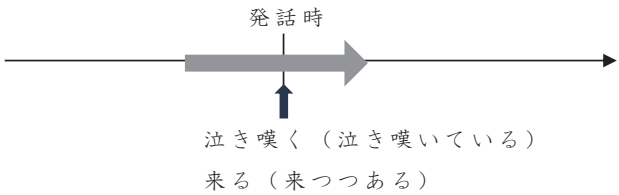
実現動詞は、 発話時を　またいで　つづいている　動作や　変化を あらわします。

翁は泣き嘆く。（翁は泣き嘆いている。）『竹取』

え知らで、かくいふ。（何も知らないであんなことを言っている。）『土佐』

小さき舟の飛ぶやうにて来る。（小さい船が飛ぶように来つつある。）『源氏』

図４．つづいているうごき



（8）実現動詞ス（泣き嘆く、言ふ、来る）は、発話時をまたいで継続・進行する三人称主語の動作や変化を表す。発話時に実現している動作や変化を話し手が目撃しそれを伝えるのである。

現代日本語のばあい、主体動作動詞、主体動作客体変化動詞の継続相（嘆いている、言っている）は、主体の動作の継続を表せるが、主体変化動詞の継続相（来ている）は、主体の変化の結果の継続を表していて、継続・進行する変化を表さない。用例の「飛ぶやうにて来る」は進行中の変化を表しているので、「来ツツアル」と訳した。

古代日本語の主体動作動詞、主体動作客体変化動詞、主体変化動詞の実現動詞スが動作の継続および変化の進行を表すのは、3 項対立型アスペクト体系の西日本方言のシヨルと同じだと考える。

1. をちかた人に物申す。『源氏・夕顔』
   (向こうの御方に申しています。)
2. 「三条、ここに召す」と、呼び寄する女を見れば、また見し人なり。『源氏・玉鬘』
   (三条さん、(あなたを) こちらに呼んでいますよ。)

【テキスト】規定４

実現動詞は　多回的な　動作も　あらわします。

黒鳥のもとに、白き波を寄す。『土佐』
(黒い鳥のもとに、白い波を寄せている。)
夜もすがら物や思ふとほととぎす天の岩戸を明け方に鳴く。『狭衣』
(夜もすがら物思いするという時鳥が、天の岩戸を開ける、その明け方に鳴いている。)
無名といふ琵琶の御琴を、上の持てわたらせたまへるに、見などして、かき鳴らしなどす」『枕草子』
(無明という琵琶の琴を、上が持ってきたので、珍しがってあちこち見た後にかき鳴らしている。)

(9) 実現動詞スは、同じ場面 (時間と空間) で動作が発話時をまたいで複数繰り返して起きる多回的な動作も表す。多回的な動作は、知覚可能であり、レアルでアクチュアルな出来事である。同一場面で実現する動作や変化を表す点で一回的な動きを表す規定３の継続・進行の用法に近く、複数性という点は反復的な出来事を表す次の規定６の用法に近い。継続・進行と反復の中間に位置する。

【テキスト】規定５

実現動詞は、反復的な　出来事も　あらわします。

このおしはかりし近江になむ文通ふ。『蜻蛉』
（あの推量していた近江に手紙が行き来している。）
穴ごとに、燕は巣をくひはべる。『竹取』
（穴ごとに燕は巣を作っております。）
男は田舎にまかりて、妻なん若く事好みて、はらからなど宮仕人にて来通ふ『源氏・夕顔』
（人は田舎に出かけていて、妻君というのが若く風好みの人でして、その姉妹など宮仕人で、来通っている）

（１０）実現動詞スは、異なる場面（時間と空間）で反復的に起きる出来事を表すこともできる。反復的な出来事は、複数性という点で多回的な動作に似る。しかし、異なる場面（時空間）で起きる出来事であり、抽象性は増しているが、習慣に比べると、抽象性は弱い。反復を表す実現動詞スは、現代日本語のシテイルに訳される。ス形は形式的には現代日本語のスルに対応するが、現代日本語のスルには反復の用法がない。

実現動詞スには次の例のような脱時間化の進んだ特性を表すものがみられる。この例をどう位置付けるかは用例を増やして再検討したい。

3.「律の調べは、あやしくをりにあふ」と聞こゆる声なれば、『源氏・帚木』
（「律の調べは、不思議に秋の季節に合う」と耳にひびく音なので、）

【テキスト】規定６

実現動詞は　発話時に　実現する　動作や　変化を　あらわします。

眼もこそ二つあれ、ただ一つある鏡を奉る。『土佐』

（眼でさえ二つあるのに、これはただ一つしかない鏡を与える。）
この三十の琴の中に、声まさりたるをばわれ名づく。一つをばなん風とつく。一つをばはし風とつく。『宇津保』
（この三十の琴のなかで、特に音色の優れている二つの琴に私が名付ける。一つはなん風と付ける。もう一つははし風と付ける。）
人は、童、大人ともいはず、「儺やらふ儺やらふ」と騒ぎののしる『蜻蛉』
（子どもも大人もみな、「鬼を払ふ、鬼を払ふ」と大声をあげて騒ぐ）

（１１）実現動詞スは、発話時に一人称の主語が発話するときに実現するうごき、効力を表す。
「奉る」「賜ふ」等の授与動詞は、話し手（一人称）が聞き手に向かって声を発することでその動詞の表す行為が実現する。物を差し出しながら話し手が「あげる」と発する現代日本語の用法と重なる。

4. 「涼にはあてこそ、仲忠には、そこに一の内親王ものせらるらむ、それを賜ふ」『宇津保』
（涼にはあて宮、仲忠には、そなたのところに第一皇女がおられるであろう、それを与える」。
5. 火鼠の皮衣、からうじて人をいだして求めてたてまつる。」『竹取』
（火鼠の皮衣は、やっとのことで人を出して求めましたので献上する。）
6. 例の藤原の瑠璃君といふが御ために奉る。『源氏・玉鬘』
（例の藤原の瑠璃君というお方の御ためにお布施をさしあげる。）

「頂く（任せる）」「聞こゆ（申し上げる）」も話し手が発することで出来事が実現する。「名づく（名付ける）」「払ふ（追い払う）」も声に発することで動詞の語彙的な意味が実現する（効力を発する）ことを表す。この用法も現代日本語の完成相非過去形スルに通ずる。

7. 東宮の学士仕まつるべきよし仰せらるるほどに、「道のことは、俊蔭に頂く。」『宇津保』
（(俊蔭は）東宮の教授職を命ぜられ、「学問のことは俊蔭に任せる。」）
8. はらからとおぼしき人、まだ臥しながら、「もの聞こゆ。天地を袋に縫ひて」と誦ずるに『蜻蛉』
（わたしの妹がまだ横になったまま、「申しあげます。『天地を袋に縫ひて』」と寿歌を唱えるので、）
9. 人は、童、大人ともいはず、「儺やらふ儺やらふ」と騒ぎののしる…『蜻蛉』
（まわりの者は、子どもも大人もみな「鬼を払う、鬼を払う」と大声をあげて騒ぐ、）

【テキスト】規定７

実現動詞は　未来の　出来事も　あらわします。

言ひ合はすべきこともあれば、ただ今渡る。『蜻蛉』
（談合しなければならないこともあるから、すぐさまそちらに行く。）
宇治へ狩しになむいく。『大和』
（宇治へ狩をしにいくのだ）
明日はあなたふさがる、明後日よりはもの忌みなり。『蜻蛉』
（明日はあちらの方角がふさがる。あさってからは物忌だ。）

（１２）実現動詞スが未来の出来事を表す例は検討した中では移動動詞が多い。動作主体は１人称である。時間副詞「ただ今」、「明日」を共起させている例があり、実現動詞スの非過去形が未来に実現することを明示している。一回的な出来事であり実現する時間が示されているが、発話時には未実現であり、非レアルな出来事を表す。なお、未来の出来事を表す「渡らむ」、「行かむ」、「ふさがらむ」などが表す未来の出来事とどのような違いがあるのかについて明らかにするのは今後の課題である。

5. 達成動詞

（１３）達成動詞のシヌとシツの二つはペアを成し併称されることが多い。1974 年版 ver2 でも終結相としてまとめられている。『改訂版』でもシヌとシツの二つの動詞を達成動詞としてまとめる。規定８はそのことを説明したものである。

達成動詞シヌはうごきが開始限界を越えたことを表し、達成動詞シツはうごきが終了限界を越えたことを表す。二つは異なる局面を表すのだが、限界達成性という共通性を重視してまとめるものである。達成動詞シヌに主体動作動詞、主体変化動詞の現れる傾向があり、達成動詞シツに主体動作客体変化動詞の現れる傾向がある。そのことを考慮して規定９と規定 10 の語例を選択している。

【テキスト】規定８

２　達成動詞

達成動詞は、 動作や　変化が　達成した　ことを　あらわします。 達成動詞には　シヌと　シツの　ふたつの　形が　あります。

黒き雲にはかに出で来ぬ。風吹きぬべし。『土佐』（黒い雲がにわかに出てきた。風が吹くに違いない。）

百人ばかり　天人　具して、 昇りぬ。『竹取』（百人くらいの天人を引き連れて昇っていった。）

はや　舟に　乗れ、 日も　暮れぬ。『伊勢』（早く舟に乗りなさい。日が暮れますよ。）

笛、笙、鼓　ひびきつ。『宇津保』（笛、笙、鼓が響いた。）

いたづらに　おほくの　橘　くひつ。『宇津保』（いたづらに多くの橘を食べた。）

一人は　頭の　かたを　射つ。『大和』（一人は頭の方を射た。）

【テキスト】規定９

達成動詞シヌは、 連用形に　ヌを　つけて　つくります。

表５

基本形	連用形	達成動詞シヌ
昇る	昇り	昇りぬ
止む	止み	止みぬ
暮る	暮れ	暮れぬ
出づ	出で	出でぬ

【テキスト】規定10

達成動詞シツは、 連用形に　ツを　つけて　つくります。

表６

基本形	連用形	達成動詞シツ
咲く	咲き	咲きつ
響く	響き	響きつ
出づ	出で	出でつ
捨つ	捨て	捨てつ

（１４）規定９は達成動詞シヌの代表形の作り方、規定 10 は達成動詞シツの代表形の作り方である。

『改訂版』の 1 章で基本形の作り方について「古代日本語の連用形はほとんどが現代日本語と同じです。終止形はこの連用形の語尾をとりかえることによってつくることができます」と規定し、次の表を挙げている。そこで古代日本語と現代日本語の連用形が同じであることを学ぶので、シヌ形とシツ形の作り方の理解は難しくないだろう。

現代語の連用形	古代語の連用形	古代語の終止形	現代語	
kaki	kaki	kaku	kaku	（書く）
yomi	yomi	yomu	yomu	（読む）
oki	oki	oku	okiru	（起きる）
sugi	sugi	sugu	sugiru	（過ぎる）
uke	uke	uku	ukeru	（受ける）
nage	nage	nagu	nageru	（投げる）
mi	mi	miru	miru	（見る）
ki	ki	kiru	kiru	（着る）

規定１１は、達成動詞シヌと達成動詞シツの活用のタイプを述べたものであり、それぞれの達成動詞の用例（非過去形、第一過去形、第二過去形、未来形、命令形）を挙げている。古代日本語の四段活用動詞と二段活用動詞は連用形の語尾の i、e を u に変えて終止形を作り、一段活用動詞は連用形に ru を付けて創る。表７は、達成動詞シヌと達成動詞シツの文末の終止形の活用形をまとめた活用表である。

【テキスト】規定１１

達成動詞シヌは、 四段活用です。　達成動詞シツは、 下二段活用です。

雨も　やみぬ。『源氏・手習』（雨もやんだ。）
一夜の　うちに　塵灰と　なりにき。『方丈記』（一晩で灰になってしまった。）
女をば　草むらの　なかに　をきて、逃げにけり。『伊勢』（女を草むらに置いて、逃げたのである。）
白き　髪の　筋も、 銀と　黄金と　なりなん。『宇津保』（私の白髪も白銀黄金となって暮しの糧となるでしょう。）
我を　うとみね。『源氏・帚木』（自分を見限ってくれ。）

月は　投げつ。『枕草子』（身は投げ捨ててしまった。）
その　よ　やがて、　むねに　釘は　うちてき。『大鏡』（あの晩、早速に人形の胸に呪いの釘は打ってやった。）
この　おとこ、　かいまみてけり。『伊勢』（この男は物の隙間から二人の姿を見てしまった。）
頸の　玉は　取りてん。『竹取』（頭の玉を取ってしまえるだろう。）
その　衣　ひとつ　とらせて　とく　遣りてよ。『枕草子』（その着物一つを与えて、早く向こうへ行かせてしまいなさい。）

表７

			達成動詞シヌ	達成動詞シツ
叙述法	非過去形	第一終止形	降りぬ。	捨てつ。
		第二終止形	降りぬ。	捨てつる。
	第一過去形	第一終止形	降りにき。	捨ててき。
		第二終止形	降りにし。	捨ててし。
	第二過去形	第一終止形	降りにけり	捨ててけり。
		第二終止形	降りにける	捨ててける。
推量法	非過去形	第一終止形	降りなむ。	捨ててむ。
		第二終止形	降りなむ。	捨ててむ。
推量法	過去形	第一終止形	降りにけむ。	捨ててけむ。
		第二終止形	降りにけむ。	捨ててけむ。
命令法			降りね。	捨ててよ。

（１５）達成動詞シヌは、次の三つの意味を表すことができる。

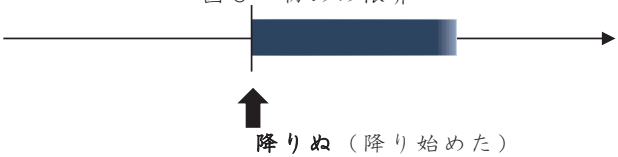
（1）動作がはじまりの限界を達成したこと
（2）少しずつ時間をかけて進行する変化が閾値を越えたこと
（3）意志的な主体の変化が始まったこと
（3）瞬間的な変化が実現したこと

【テキスト】規定１２

達成動詞シヌは　はじまりの　限界を　越えて　動作や　変化が　はじまった　ことを　あらわします。

まかなひさわぐほどに、「雨降りぬ」と言へば、いそぎて車乗るに『枕草子』
（食事の世話をして騒ぐうちに、供の者が、「雨が降ってきました」と言うので、急いで車に乗る時に、）
黒き雲にはかに出で来ぬ。風吹きぬべし。『土佐』
（黒い雲がにわかに出てきた。風が吹くにちがいない。）

図５　初めの限界



（１６）無意志的な主体の運動（自然現象）を表す「降る」「(黒き雲）出で来」は、語彙的な意味に開始限界が含まれる内的限界動詞である。このタイプの達成動詞シヌは、発話時に自然現象が始まったことを表す。発話時以降も「雨は降り続けている」し、「黒い雲は出続けている」が、それは含みとしてあり、達成動詞シヌは開始限界を越えたことを表すので、「～しはじめた」「～してきた」と現代語に訳した。「降りぬ」、「出できぬ」が「(雨が）降ってきた」、「(風が）出てきた」と過去

形に現代日本語訳されるのだが、この形式は非過去形であり、発話時に「降る」「出てくる」動作や変化が実現することを表す。

上の用例中の「風吹きぬべし（吹くにちがいない）」は発話時以降の未来に「吹きはじめる」ことを表している。達成動詞シヌがテンスを表す形式ではなく開始限界達成を表すことを裏付ける。

【テキスト】規定 13

達成動詞シヌは　少しずつ　時間を　かけて　進行した　変化が　閾値を越えた　ことも　あらわします。

はや舟に乗れ。日暮れぬ。『伊勢』

（早く船に乗れ。日が暮れてきた。）

潮満ちぬ。風も吹きぬべし。『土佐』

（潮が満ちてきた。風も吹き始めるだろう。）

夜ふけぬ。かへりたまひね。『平中』

（夜がふけてきた。もう帰りなさい。）

図７　閾値の達成

満ちぬ（（潮が）満ちてきた）

（１７）「満ちる」「暮れる」「更ける」のようにゆっくりと進行する自然現象を表す主体変化動詞は、変化がいつ始まったのかその開始限界（境目）がぼやけている。このタイプの主体変化動詞の達成動詞シヌは、発話時に変化が一定の量、すなわち閾値を越えたことを伝えるものである。「満ちぬ」も「暮れぬ」も「ふけぬ」もゆっくり進行する変化が閾値を越えたと知覚したことを伝えるもので、「（潮が）満ちてきた」、「（日が）暮れてきた」、「（夜も）更けてきた」のように「～してきた」と現

代語訳して開始限界を越えたことを示した。発話者によって閾値に達したと認知されたあとも変化は発話時以降も進行する[8]。

主体変化動詞は変化の達成＝終了限界の内的限界動詞だが、ゆっくり変化が進行する自然現象を表すタイプの達成動詞シヌは、閾値を越えてさらに変化が進行する開始限界が前面化される。閾値越えが開始限界達成になる。

なお、このタイプの達成動詞シヌには発話時以前に閾値を越えたことを伝えるシニキ、シニケリの過去形がある。

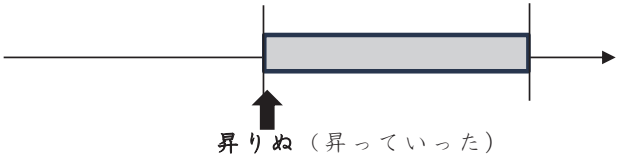
10. 香隆寺に参るとて、見れば、木々の梢ももみぢにけり。『讃岐』
（香隆寺にお参りしようと思って、行き着いてみると、木々の梢も紅葉していた。）

【テキスト】規定 14

達成動詞シヌは　意志的な　主体の　位置変化が　開始したことも あらわします。

百人ばかり　天人　具して、　昇りぬ。『竹取』
（百人くらいの天人を引き連れて昇っていった。）
とみにもえ歩み寄らず、からうじて局に歩み行きぬ。『落窪』
（部屋に歩み寄ることができず。やっとのことで、部屋に歩いて行った。）
「親の家にこの夜さりなん渡りぬる」と答へはべり。（『源氏』
（『親御さまの家に、夜になって出かけていった』と、答えます。）

図８　瞬間的な変化の達成・実現



[8] 終了限界もぼやけていて次の新しい状態への移行（境界）も明確ではない。

（１８）「昇る」「あゆみ行く」「渡る」等の位置変化を表す移動動詞（主体変化主体動作動詞）は、出発（開始限界）と到着（終了限界）を表す内的限界動詞であり、主体の意志的な動作の開始と位置変化の終了を表す二側面動詞である[9]。このタイプの動詞が達成動詞「昇りぬ」「あゆみ行きぬ」「渡りぬ」になると、発話時に開始限界を越えたこと（出発）が前面化される。

主体動作客体変化動詞（他動詞）の達成動詞ヌの用例は少ない。次の例 12 の動詞「ゐさす」は、主体の意志的な動作開始と客体の変化終了を表す二側面動詞である。このタイプの動詞が達成動詞シヌ「ゐさしぬ」になると開始限界（主体の動作）が前面化される。

例 12 の動詞「打つ」は、客体の変化に無関心な他動詞で、主体動作に分類される。しかし、例 13 では「目打つ（碁を打つ）」で現れている。このばあい、意志的な主体の動作開始だけでなく、勝敗が決着する終了限界も表す二側面動詞的な使用である。達成動詞シヌ形「目打ちぬ」は開始限界が前面化される。

11. その御弟の二の宮、坊にゐさせたまひぬ。（落窪）
（新帝の御母の第二皇子が東宮におなりになった。）
12.「双六うたむ」と言へば、「よかなり。物見つくのひに」とて、目うちぬ。（蜻蛉）
（「双六を打とう」と誘われたので、「いたしましょう。見物席を賭けにして」と言って相手をし、わたしがよい目を打ち出して勝った。）

【テキスト】規定 15

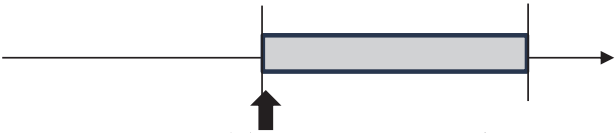
達成動詞シヌは　瞬間的な　変化が　達成・実現したことも　あらわします。

頭つき、髪のかかりば、いとをかしげなりと見るほどに、灯消えぬ。『落窪』
（髪かたち、髪のかかり具合が、たいそう心ひかれる美しさだと見るうちに、灯火が

[9] 二側面動詞については工藤（2014. p. 211）を参照。

消えた。）

図８　瞬間的な変化の達成・実現



昇りぬ（昇っていった）

（１９）「消ゆ」「灯る」などの出現消滅系の主体変化動詞は、変化の実現が瞬間的で変化前の状態と変化後の状態が明確に区分できる。このタイプの達成動詞シヌは、変化後の新しい状態（灯が消えて暗い状態）の出現、すなわち、開始限界達成を表す。

【テキスト】規定 16

達成動詞シツは　動作が　おわりの　限界に　到達・達成したことを あらわします。

いたづらに　おほくの　橘　くひつ。『宇津保』

（いたづらに多くの橘を食べた。）

一人は　頭の　かたを　射つ。『大和』

（一人は頭の方を射た。）

国にもいみじきあたら兵一人失ひつ『源氏・浮舟』

（国にとってもたいそう惜しいことに武士一人をなくしたのです。

玉の取り難かりしことを知りたまへればなむ、勘当あらじとて参りつる。『竹取』

（玉を取ることが困難なことをお知りになったので、おとがめもあるまいと存じ、帰参いたしまた。）

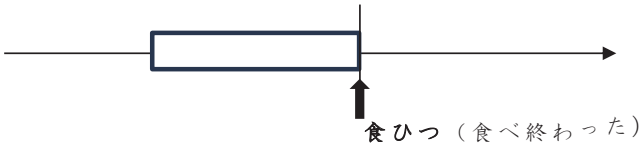
笛、笙、鼓　ひびきつ。『宇津保』

（笛、笙、鼓が響いた。）

物忌みしたまふべき夢を見つ。『宇津保』

（物忌みをなさらなければならない夢を見た。）

図９　終了限界の達成・実現



（２０）「食ふ」、「射る」等の主体動作客体変化動詞は、主体の意志的な動作開始と客体の変化終了を表す二側面動詞である。このタイプの動詞が達成動詞シツ「食ひつ」になると終了限界（客体の変化）が前面化される。

位置変化を表す移動動詞「参る」（主体変化主体動作動詞）は、出発（開始限界）と到着（終了限界）を表す限界動詞であり、主体の意志的な動作と位置変化の終了を表す二側面動詞である。このタイプの動詞が達成動詞シツ「参りつ」になると、終了限界達成（到着）が前面化される。「帰参した」と現代語訳することで終了限界達成を示している。

図１０　終了限界の達成・実現

6. 達成動詞のまとめ

先に述べたようにシヌもシツも非過去形である。それにもかかわらず、(1) 降りぬ(降りだした)、(2) 暮れぬ(暮れてきた)、(3) 昇りぬ(昇っていった)、(4) 消えぬ(消えた）と開始限界達成を表すシヌを過去形に訳し、終了限界達成を表すシツを (5) 食ひつ（食った）と現代語訳している。いずれも過去形に訳している。このことを理解するには、現代語のシタの理解が必要である。

奥田靖雄（2015）は完成相「する」に、(1) 限界に到達して完結した動作・変化、(2) ひとまとまりの動作、(3) 始まりの限界をこえて、その後もつづいている動作、

の三つがあることを論じている。古代日本語の開始限界達成のシヌが表すのは、(3)の始まりの限界を越えてその後も続いている動作である。シツが表すのは、(1)の限界に至って完結しそこから先へは続かない動作である。

「する」というかたちの動詞は、限界へ到達した動作・変化、限界へ到達することで完結した動作・変化をいいあらわしている。(1) 限界にまでいたって、完結し、そこからさきへはつづかない、ということで、このような動作・変化をいいあらわす「する」は、《完成相》と呼ばれることになる。さらに、この完成相の動詞は、(2)《はじめ》から《なか》をへて、《おわり》にいたるまでの、ひとまとまりの動作をいいあらわすことができる。(P. 118. 下線とカッコ数字は筆者)

完成相においても、(中略) (3) はじまりの限界をこえて、その後もつづいている動作をさしだしているばあいがある。(P. 141. 下線とカッコ数字は筆者)

奥田靖雄 (2015. 162) は、完成相過去形シタが発話時以前に発生した動作や変化が発話時にどのような局面で現れるか、その現れ方を (a) アオリスト的な過去、(b) パーフェクト的な過去、(c) インパーフェクト的な過去、の三つを取り出しているが、開始限界達成のシヌはインパーフェクト的な過去である。

7. 今後の課題

アオリスト的な過去を表すのは、古代日本語のシキではないかと考えるが、その詳細な検討は今後の課題である。結果動詞のシタリの解明も残されている。

これまでは個々の形式の検討を優先させてきたが、今後は、うごきの時間的な展開過程を表す四つの形式がどのような体系を形づくっているか検討をすすめるとともに、四つの動詞の第一過去キ、第二過去ケリを検討したい。

参考文献

奥田靖雄 (1992)「動詞論」北京外国語大学での講義プリント (奥田靖雄著作集刊行委員会編 (2015)『奥田靖雄著作集 3　言語学編』むぎ書房に所収)

奥田靖雄（1988）「時間の表現（1）（2）」教科研国語部会編『教育国語』94 号、95 号、むぎ書房．
狩俣繁久・島袋幸子（2024）「説明の文として機能する沖縄語謝名方言のシテアル文」日本方言研究会編『方言の研究』10 号、pp125-148、ひつじ書房．．
工藤真由美編（2014）『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』ひつじ書房．
工藤真由美編（2004）『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系ー標準語研究を超えてー』ひつじ書房．
鈴木泰（2014）「アスペクト（古代語）」日本語文法学会編『日本語文法事典』pp12-pp14、大修館書店．
鈴木泰（2014）「ツ・ヌ」日本語文法学会編『日本語文法事典』pp410-pp412、大修館書店．
高瀬匡雄（2014）『奥田靖雄の国語教育論―子どもたちをすぐれた日本語のにない手に―』むぎ書房．
山田健三（2004）「係り結び・再考」『国語国文』73-11、pp15-pp33、京都大学

参考資料

【卒業論文】

上地江利子 1998「古典日本語における動詞のテンス・アスペクトー「ーnu」「ーtu」の形態論的意味を中心にー」
玉城あゆみ 1999「古代日本語における動詞のテンス・アスペクトー＜ーたり形＞のアスペクト的な意味についてー」
与儀律子 1999「古典日本語における動詞のテンス・アスペクトー＜はだかの形＞についてー」
儀間彩子 1999「古代日本語における動詞のテンス・アスペクトーかたり文の＜はだかの形＞のアスペクト的意味についてー」
山城知美 1999「古代日本語における動詞のテンス・アスペクト～＜ーり＞の形を中心に～」
渡真利聖子 2001「古代日本語における動詞のテンス・アスペクト・ムードー会話

文の＜ーけり＞形のテンス的意味についてー」

新垣友理 2001「古代日本語における動詞のテンス・アスペクト・ムードー＜ーき＞形のテンス的意味を中心にー」

島袋直美 2002「古代日本語のモダリティーー会話文における＜ーべし＞形の文についてー」

仲筋沢子 2002「古代日本語における動詞のモダリティーー会話文における＜ーむ＞形の文についてー」

金城理沙 2002「古代日本語のモダリティーー会話文における＜ーらむ＞形の文についてー」

太谷真理子 2002「古代日本語のモダリティーーメリをともなう文についてー」

豊見本紗希 2008「古代日本語のテンス・アスペクト・ムードーけむ形についてー」

小那覇泉 2009「古代日本語のに格の名詞と動詞のくみあわせについてー『源氏物語』の用例を中心にー」

友利沙綾 2011「古代日本語のモダリティ形式と焦点化助詞ー「か」「や」「こそ」についてー」

比嘉歩夢 2014「古代日本語のテンス・アスペクト・ムード―シケリ形のアスペクト有標形式を中心に―」

崎間祐賀子 2018「古代日本語における条件づけを表現するつきそい・あわせ文―つきそい文の述語がーeba の場合―」

砂川すみれ 2018「古代日本語における条件づけを表現するつきそい・あわせ文―つきそい文の述語が - aba となる場合―」

備瀬百合音 2018「古代日本語におけるとりたて助辞とモダリティ―「～こそ」「～なむ」「～ぞ」―」

【修士論文】

上地江利子 2001「古代日本語における動詞のアスペクト・テンスについてー＜ーぬ＞の形態論的意味を中心にー」

山城知美 2004「古代日本語における動詞のテンス・アスペクトーシタリ形・セリ形についてー」

渡真利聖子 2004「古代日本語における動詞のアスペクト・テンスーシツ形について－」
太谷真理子 2004「古代日本語のモダリティーメリをともなう文について－」
金城理沙 2004「古代日本語のモダリティー－会話文におけるラム文について－」
玉城あゆみ 2005「おわりの局面をあらわす動詞」
小那覇泉 2012「古代日本語のを格･に格の名詞と動詞とのくみあわせ―『源氏物語』の用例を中心に―」
豊見本紗希 2012「古代日本語のおしはかり―む・らむ・けむ形について―」